

学科 管理栄養学科	氏名 岡田 瑞恵
-----------	----------

家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

イ ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。

ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。

ハ こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。

1 教育の責任

自らが考え、選択し、責任ある行動ができるように、社会で生きていける力を育むことが教育の責任と感じている。知識を獲得することは、共通の言語を持つという意味でも必要であるが、物事の学び方や「どう生きるか」についても方向性を与えることも教育の責任であると考え、個人の成長と社会の発展に貢献する人材育成に努める。規制や管理だけでは、精神性は育たないと感じる。担当する科目は基礎専門科目に位置し、健康づくりのベースを多面的に学ぶ。健康を維持増進するための要素や社会の取り組み、そして何よりも「受動的な健康」から「能動的な健康」への意識の転換を図ることに努める。2026年3月の時点で、愛知学泉大学管理栄養学科管理栄養学科の教員として5年目を終了した。以下の表は、担当する科目の一覧である。

科目名	学年	開講期	授業者数	備考
健康管理概論	1年	1年前期	60	管理栄養士必修科目
公衆衛生学Ⅰ	1年	1年後期	58	管理栄養士必修科目
公衆衛生学Ⅱ	2年	2年前期	64	管理栄養士必修科目
公衆衛生学実習	2年	2年後期	64	管理栄養士必修科目
臨床総合演習	4年	4年前期	62	管理栄養士必修科目
専門実践実習	3年	3年前期	22	管理栄養士必修科目
管理栄養士特論 A・B・C(国試対策 関連オムニバス)	3年・4年	3年後期 4年前・後期	69/ 62/62	管理栄養士必修科目
卒業研究	3-4年	3後期～4年前期	4(3年)・4(4年)	卒業必修

その他) ハラスメント委員、国試対策委員(管理栄養士)、3年クラス担任指導、学科図書担当、臨地実習巡回、入試担当、国試対策講座、高校訪問、バス見学会、オープンキャンパスなど。

2 教育の理念と目的

管理栄養学科の教育目標は、「家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成すること」である。また、記述した先の「教育の責任」にも

記したが、これらの目標を達成するため、自らが考え、選択し、責任ある行動ができることが教育の理念であり、目的と言える。さらに、立場が変われば価値観も大きく変わる。社会のなかで多面的に物事を捉えることのできる視点を持つこと、急速に変化する社会に適応できる基礎力を持つことが現代に求められる人材と考える。

3 教育方法

健康管理概論（1年前期）および公衆衛生学Ⅰ（1年後期）は、「健康」の考え方を、これまでの受動的な捉え方「健康はそこにあるもの」から能動的な捉え方「健康は自らがつくるもの」へ考え方をシフトさせること、つまり、ヘルスプロモーションの考え方を理解し、実践に繋げることが第一歩である。それと同時に、基礎的な知識の獲得・応用に努め授業を進めた。教育方法は、両者とも授業スライド¹⁾を授業資料として活用し、前週が終了した週に次回予習のための次週スライドをGoogleクラスルームに上げ予習を促した。これによって、本時前にテキスト内容とともに予習ができるため（PCRシート予習・復習²⁾）、自己学修の一助となると考えている。さらに、PCRシート内に、授業中に分からなかった言葉や内容について、調べて記述する部分を設けているため、その部分も自己学習の一部が反映される。また、中間テスト³⁾を行い、中間到達度を可視化するとともに、本時のなかでフィードバックを行い、学生が顧みる時間を設けた。

公衆衛生学Ⅱ（2年前期）もまた、同様に進めているが、授業で扱う内容が実生活に即した保険制度・環境・法律などが中心となるため、学生には距離がある。机上の空論としないためにも、授業内容から一つテーマを斑で抽出し、最終週に課題の背景、抱える課題、解決策などのプレゼンテーションを課している。ねらいは、少しでも保険・社会制度が身近なものであること、人々の暮らしを支え、困窮者の救済支援に基づいたものであることを理解してもらうこと。さらに人の消費活動によってもたらされた地球環境の変化に対し、世界がどのような状況にあるのか、事実を理解しどうすべきかを個人レベルで出来ることの模索、また国レベルでの対策や法律などを理解してもらうことを目的としている。講義科目では、シラバスの到達レベルCの基準にある課題を中間テスト³⁾および期末テスト⁴⁾の一部に含んでいる。

公衆衛生学実習は、実習プリント⁵⁾を前週にクラスルームに上げ予習を促した。科目の特性として、健康の指標、労働衛生、環境衛生などの計測を行った。項目が終了する度にレポートを求めて各自に提出してもらい、提出された実験レポートは全て評価を付しフィードバックを行った。さらに、最終週には全ての内容について、目的、方法、結果、考察をグループワークとしてプレゼンテーションしてもらい、振り返りに繋げた。

〈シラバスに記載している評価方法〉⁶⁾

健康管理概論：試験70%、中間テスト20%、社会人基礎力を10%として評価している。

公衆衛生学Ⅰ：試験70%、中間テスト20%、社会人基礎力を10%として評価している。

公衆衛生学Ⅱ：試験70%、中間テスト10%、成果発表10%、社会人基礎力を10%として評価している。

公衆衛生学実習：中間テスト20%、レポート70%、社会人基礎力を10%として評価している。

2025年度の卒業研究においては、アミロイドβタンパクと糖化反応の影響による炎症の抑制について、食品由来成分の貢献を検討した。

4 授業改善の活動

前年度の授業評価アンケート結果やクラスルームを通じて寄せられた質問や中間テスト³⁾の結果から改善点を抽出している。主に、授業への還元として、予習→本時→復習の流れや課題内容の改善を行っている。また、その授業評価におけるリフレクションパーパーに改善案を記載している。さらに、FDによって得られた実践例の紹介や情報などの活用からの改善によって評価成績が前年度より向上したか否かを考察している。

5 学生の授業評価

公衆衛生学Ⅰ・公衆衛生学Ⅱおよび、公衆衛生学実習は「強く思う。」「やや思う。」の評価であり、高い評価結果であった。後期科目を例にとると⁷⁾、特に高かった評価は、公衆衛生学Ⅰの質問1の「この授業は、シラバスに一致して実施していたと思いますか。」、質問5の「この授業では、教員は熱意や意欲をもって授業に取り組んでくれたと思いますか。」であった。また、公衆衛生学実習においては、質問2の「この授業では、学生が積極的に取り組めるような工夫（課題・グループワーク・発表等）がなされていたと思いますか。」、質問5の「この授業では、教員は熱意や意欲をもって授業に取り組んでくれたと思いますか。」であった。授業のなかで、言葉や文章の解釈が分からない学生が存在することに気づかされる。また、実習や卒業研究など、距離感の近い授業は評価が高い傾向があると感じる。コミュニケーションが多い実習科目は、勘違いや誤解が少ないと感じる。成績

は、2 極化傾向の開きが昨年度より大きくなり、指導に難しさを感じている。

6 学生の学修成果

公衆衛生学実習（2 年後期開講）の評価分布を以下の表に示した。各項目のレポート評価(70%)、中間テスト(20%)、授業内課題・PCR シートおよび社会人基礎力(10%)の総合点として評価している⁶⁾。実習はグループワークを通して協働することで進められるため、他者の意見を聞くこと、コミュニケーション力・調整力が求められる。レポートは、実践により獲得した知識を含め、文章力、まとめる力、思考力、考察力、客観性などを活用し記述することが求められる。

2025	秀(S)	優(A)	良(B)	可(C)	不可(F)
平準化目安	10%	30%	35%	25%	
公衆衛生学 実習	1%	6%	15%	35%	1%

7 授業科目に関連した教材開発

- ① テキスト：Active Aging 健康管理学 - 予防医学の視点から - （第 2 版）岡田悦政・岡久玲子・鈴木寿則・小林靖・小林敏生・岡田瑞恵・神田裕子・大槻伸吾・中西員茂・藤岡弘季著 八千代出版 2021 年 4 月 第 6 章執筆
- ② 授業進行プリント（公衆衛生学実習、グループワークシート、課題を一部含む）の作成
- ③ 授業スライド（健康管理概論・公衆衛生学Ⅱ・公衆衛生学Ⅰ・公衆衛生学実習・管理栄養士特論 A・B・C）の作成
- ④ PCR シートの作成（予習・復習 / チャレンジ課題、授業中における不明部分を自己学習する部分を含む）

8 指導力向上のための取り組み

FD の研修会への参加、マンツーマン指導、少人数指導などは気づきが多くある。FD への参加については、科目は異なるが応用できる要素がある。また、マンツーマン指導や少人数教育は、個人に向き合うため反応が見え、躓きがどこにあるかが分かり易い。常にマンツーマンとは行かないが、少人数のチュートリアル形式が良い形に思える。

9 今後の目標

公衆衛生学Ⅱでの最終取り組みとして課題抽出によるプレゼンテーションを課している⁶⁾。昨年までのテーマはテキストから抽出し、掘り下げて取り組んでもらった。次年度は、実社会の課題を抽出してもらい、広く公開されている情報から課題を抽出し、PBL(課題解決型)とし、解決策まで模索して結論を出してもらおう形に更新する。これによりより現実的な課題に向き合い、課題解決まで導いてもらう。また、公衆衛生学実習において、実習内容の早総括のプレゼンテーションを評価対象に改める。

10 添付資料

- 1) 授業スライド（公衆衛生学Ⅰ・Ⅱ・公衆衛生学実習）
- 2) PCR シート（健康観理学概論および公衆衛生学Ⅰ）
- 3) 中間テスト（健康管理概論および公衆衛生学Ⅰ）
- 4) 期末テスト
- 5) 公衆衛生学実習 授業進行用プリント
- 6) 2025 年度シラバスを参照（健康管理概論・公衆衛生学Ⅰ・公衆衛生学Ⅱ・公衆衛生学実習）
- 7) リフレクションペーパー2025 前期・後期